

VI ASTRAL BOOUT



ADULT
ONLY

あのバカー：
どうしてあんなに
ニブイのかナー：

あだしがまんをに
.....

貴子！
ホッパイ！
むとらけん



びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょびしょびしょびしょ.....

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ

びしょびしょ



んん〜♡

とんだ淫妻だ
なの？え？
おい！

んん〜♡

んん〜♡

んん〜♡

んん〜♡

強く縛られたら
イヤなんだよわ、

んん〜♡

んん〜♡

んん〜♡

もっと強くもんでえ〜♡

んん〜♡

んん〜♡



ほら、
俺のこゝろはあなた
大好きだよ♡

大好きだよ♡

んん〜
大好き〜♡

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

んん〜

ニギニギ

んん〜

んん〜

大好き〜♡

大好き〜♡

大好き♡
大好き♡
大好き♡

もっとおーー

ガーッと
ちびちび

もっと
しびる



びび

んんん

んんん



おののの
おののの

おののの
おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの

おののの
おののの
おののの
おののの
おののの

戦
舞
征

作

Y

イラスト

むとうけいじ

第一章『誇りなき転進』

Y

一、黒い炎

シナリオなんてものを書いている。

脚本家などと言われると面はゆいが、とにかくこのおれ……Yはシナリオ・ライターであるということだ。

脚本と称してもいろいろある。ピンキリというやつだ。

上は印税生活の大家先生、下は玄孫受けゴーストライター。

この仕事をしていけば、孫請けなんて可愛いモノだ。

特に巨額が動く仕事では、間にどれだけの人間が入り、金を抜いているか知れたものではない。

モノを書くという誰にでもできる仕事ゆえ、よほどの腕前がない限り、その立場は取り替えのきく消耗品とかわらない。

搾取されて当たり前。

ギャラは安くて当然なのである。

しかし、だとしても、因果な業界だ。

望んで飛び込む者がいる。

気がつけば書いている者もいる。

やる気のない者は脱落し、気概のある者が生き残る……と言いたいところだが、上述したような下るに際限のないこの界限は、やる気がなくとも生き残れるのが現状だ。幸か不幸か。

さりとて、さすがに上に行こうと思えばそれなり
のものにはなる。

実力・運・流れ。そういった試練によって、厳選
されていく。

そこには他業種で匠と言われる者たちが通過する、
険しい道のりというやつが待っている。

壁として立ちふさがる。

砕いて進む必要があるのだ。

言霊を会得しようと、己の書くものを箴言にも高
めようと、漢たちの闘いは飽くことを知らない。

いや、知ってはならぬのだ。

甘い蜜のごとき敗北を、知ってはならぬ。

飽いてはならぬ。

老いてはならぬ。

休んではならぬ。

寝てはならぬ。

書け。いや、食え。
食らえ。

魂の牙で、咀嚼し、砕き、嚥下しろ。
物書きは不滅である。

書いている間は時が止まるからだ。

そして気がつけば死んでいる。

それで良い。

それが良いのだ。

死ぬ時は前のめりが良い。

文字通り、鍵盤(キーボード)に突っ伏して死な
ねばならぬ。

物書きの死に様である。

おれに許された、唯一の結末でもある。

そう決めている。

映画、テレビ、アニメ、ラジオ……いろいろなシ
ナリオがある。



様々な脚本が必要なのである。

言葉と空想をませる。物語ができる。

食い扶持だ。

物語を書いて金をもらおう。

この世にはなんと物語の多いことか。

映画、テレビ、アニメ、ラジオ……いろいろある。

人は食物を腹におさめるに酷似したどん欲さで

物語をすすべている。

いつだって「いい話」を人は求めている。

餓えていた。

間違いなく、奴らは餓えている。

対して、おれは書ける。

だから書くのだ。

奴らから絞れ取らねばならぬ。

怒りを、涙を、感嘆を、精液を。

奴らがおれから物語を搾取することに対し、正当

な代価を求めなければならぬ。

毀誉褒貶があるべきだ。

それが何よりの報酬だ。

称賛。いや、非難がいい。

理不尽な、ただ主観にのっとただだけの、攻撃的

かつ横暴な、論理とも言えない論理でこきおろされ

るのがいい。

ありとあらゆる恣意的な言葉で攻撃しろ。

もつとも完成度の高い部分を侮辱してのけろ。

揚げ足を取れ。

誤植を重罪として掲げろ。

モチーフの選択を稚拙とあざ笑え。

テーマが陳腐であると失笑しろ。

王道を盗作・剽窃と言いつれ。

特異さを平凡と断定しろ。

丁寧さをくどさと換言しろ。

全否定しろ。

それこそおれの復讐なのだから。

奴らに感情的に叫ばせることで、おれは書くこと

ができる。

では何を書くべきか？

決まっている。

エロゲーだ。

エロゲーだ。

二、起案

「面白いんだけど、没ですわ……」

その言葉が心に浸透するのに、わずかばかりの時

間を要した。

「……没？」

「うん、申し訳ないけど……」

沈黙が満ちた。

ここは田町にあるとあるゲーム製作販売会社の、

ビルの中だ。

スタッフが欠けているらしく、妙に広々とした仕

事場に、ディレクター氏の質素なデスクがあった。

卓上には旧型のCRTモニターとキーボード、積

まれた書類、薄汚れたマウスパッド、灰皿は吸い殻

でいまにも溢れそうだった。使用後の紙カップが窓

際の隙間に塔のように立ち並び、異様なオブジェと

化している。周囲全体が黄ばんでいることが、ディ

レクター氏のチェインスモーカーぶりを物語ってい

る。

こころなしに、触れた机の角がぬるついている気

がした。

机の横には、ケースがないむきだしのPCが置か

れており、今もカチカチと異音を立てている。

その脇で、おれは地蔵のごとき無表情ぶりで、シ

ートの破けた事務用椅子に座っていた。

没。

没である。

この会社に足を運んだのは、三度目だ。

ウィンドウズ用18禁PCソフトのシナリオライテ

ィングの職に就くためであった。

一度目は面接。

二度目は企画打ち合わせ。

そして三度目の打ち合わせ。

ウィンドウズ用18禁PCソフト。

パソコンで遊ぶ成人向けソフトはずいぶん前から

存在するが、ウィンドウズへの移行とともに市場

全体が活性化しつつあった。

いわゆるオタク分化の、欠くことのできない一側

面を担いだことは、メジャー化への推移と見る

こともできるかもしれない。

その、企画書である。

すでに15を上回る数を提出し、ことごとく没を食

らっている。

今回も、七つの企画をまとめて出した。

ゲーム業界ははじめてのことで勝手はわからな

かったが、書類を作っているだけで手応えを感じてい

た。

書いても書いてもアイデアが湧いてきた。

思考速度に手が追いつかないほど、夢中になって

仕上げた。

興に入った企画であった。

脂の乗った企画であった。

実際に執筆すれば、どれもそれなりのものにでき

る予感があった。

遠い。

「な、なぜですか？ どこがいけなかったのです？」

腰を浮かせ、おれは問いかけた。

「ええと、まあ見てみたんですが……ちよつと商品化は難しい、ということだ」

「具体的には？」

「えー、上の者が判断しましたので……」

「あなたでは、わからないと？」

「あ、いえ、だいたいはわかりますよ」

「是非聞かせてください」

「そうですね。たとえば、全体的にちよつと現実味が
ない面がありますね」

「それはジャンルがオカルトものだから、という意味
ですか？」

「まあ、そんな感じですよ。やっぱりこう、魔法とか出
てきますと、現実味がないものになってしまうんで」

「現実味……」

「ユーザーさんが置いてけぼりになってしまいます
し」

「物語ですから……そんなことは、ないと思いますが
……そんな魔術が出てきたくらいで」

ディレクター氏は答えなかった。
あいまいな苦笑いだけが、その顔に張りついていた。

「ええ、うまくやれば、きつとそうなのだと思います
が……ええ、すいません」

頭を下げられる。
おれは続く言葉を、呑み込まざるを得ない。

「では」と心中に渦巻くものを無視して問う。「いつ
たい、どのような企画だといいでしょね？」

無駄と思いつつ、訊いてみた。
打ち合わせのたびに同じ質問をしているが、ディ

レクター氏から明解な回答を得られたことはない。

質問に限らず、この御仁の言うことはどこか他人
事のように、菌切れが悪い。

断定をほとんど不自然なまで避けている。できな
い理由でもあるのか？とさえ思う。

そして氏の口から、いつもの決まり文句が出た。
「そうですね……Yさんのお好きな企画で」

その好きな企画は通らないじゃないか——
皮肉めいた言葉を嚙下する。

言葉で人を傷つけ、遠ざけるのはもうこりこりだ
った。

そんなことをしても、居場所を失うだけである。
自分の価値を落とす、孤独になるだけだ。

刃物になるくらいなら、道化になるべきなのだ。
物書きは、そのための手段だ。

「二心これも好きな……企画なんですけどねえ」
人当たりが良さそうな青年を演じる気持ちで、落
胆してみせる。

「いや、申し訳ないです……やっぱりちよつと厳しい
部分がありますねえ」

腰の低さが意外とくせ者である。
喜怒哀楽、相手のどんな感情にも、これ一つで対
応できるからだ。

「……と言いますと？」

「あ、いや、気にしないでください。私の言ったこと
で影響を受けられてもアレなので。Yさんの好きな
ものを魂をこめて作ってくれればと思います」

「好きなとおっしゃいますが……自分なりにリサー
チしてみたんですが、ちよつと前まではこういうオ
カルト系の企画というのもあったように思うんです
が？ 御社でも、ほら、いくつか」

「ああ、あれは売れなかったのだから」

おれは直感と感性でものを作っていた。

体内からの情熱に後押しされれば、怖い物などな
い。魂のこもった創作こそ最上であり、脚本は工業
製品ではなく須く芸術であるべきだ。

世間に認められなかった人間が、ようやく掴んだ
糸口に至上の価値を刷り込まれる態度で、おれはも
のを書くことに魅せられていた。

そんな片意地な若造である。

持ち得るすべての力で仕上げた企画には、自信も
思い入れもあった。

だがまだ完全燃焼にはほど遠い。

企画書は所詮入口だ。

実際の作業、本物の脚本の、さわりといえる。
余熱は芯でくすぶり、すぐにでも再び燃え上がり
そうな危険な熱量を発している。

すぐに書かせろ。

そんな顔で、ディレクターと相対する心構えのお
れだった。

だが……没。

今度こそはと思ったのだ。

前回までの企画を没にされたことをばねに、いく
つかの欠点も克服したつもりだった。

隙のない企画に仕上がったはずなのだ。
なぜ？

なぜ没なのだ？

魂が足りなかつたのか？
おれはとつきには、的確な疑問を投げかけること
ができていた。

「今回も、没ですか？ 全部ですか？」
「ええ、そうですね……残念ですが」
七つすべてが没。

手違いでも起きたのかと思えるほど、言葉は耳に

「ああいうものは、売れませんか。しかし他メーカーの……」

「ええ、ええ、わかります。売れてるところもありますけど、そういうところは積み重ねがあるので。ただうちだと……」

「そうですね……」

言われてみれば、そうかも知れない。

確かにオカルトや伝奇ものというところ、ビジネスとしてはリスクが大きいのだろう。

にしては、この会社のラインナップはあまりにも冒険寄りに思えた。

海賊娘の話。

格闘もの。

くのいものまでではないか。

雑多なソフト群を有するメーカーである。

そのことを指摘すると、ディレクター氏はことさらに困った顔を作った。

「あれは売れてないんですよ。それで、Yさんには活路を切り開くような、新しい流れをと思ひまして」

なるほど、新しい流れか。

企業の論理というやつだ。

「……わかりました。考え直してみます。では、今度ももつとエロ面を強調してみようと思うのですが」

「ああ、エロもいいですよ。別に」

「え？」

素っ頓狂な声をあげてしまう。

エロを軽視してもいいものなのか、と。

それではまるで、純愛ものではないか。

おりしもエロゲー群雄割拠の時代、純愛ものが隆盛を迎えようとしていた。

エロゲーはときに美少女ゲームとも呼ばれた。

美少女ゲームとは言っても、内容に性交を含むポ

ルノ・メディアである。

A Vや成人向書籍と同じく、過激なHシーンがその売りとなるべきものである。

確かにそうしたホルノ色の強いエロゲーも大きなシェアを持っていたが……それ以外に、感動的な純愛ものエロゲーなるものが、一群となって台頭してきたのであった。

純愛ものであるからには、主軸は恋である。

エロゲーの中には、レイプや監禁等を扱った暴力的なものもあるが、恋となるとそうはいかない。

では恋愛が成就したあとの、惚れた相手とのめくるめく官能描写が人気の秘訣なのだろうか？

否。

むしろエロシーンは、生々しすぎるとしてオミツトされていた。

あまりにも美的に強調しすぎたオタク向け感動純愛ものというジャンルは、性行為の生々しさを許容してはいなかった。

たまにエロシーンに多くの描写を割いたものもあったが、本編が美しく感動的であるほど、その場面は浮いていると評されることが多かった。

確かに、詩美的な恋愛ものに官能小説を思わせる濃厚なテクストは合一するものではない。

後に純愛に多くの性描写を組み合わせたジャンルも発展してくるが、時代はいまだ、かような珍奇なバランスを受け入れられる市場を形成できていなかった。

さらにこの〇〇〇というメーカーは、今までのラインナップからして純愛ものは避けていると思われる節があった。

ブランドイメージというやつだ。

となればエロに傾倒するしかないではないか。

「あの、〇〇〇さんのタイトルで、エロが薄いものという想像ができないのですが？」

「ああ、そのことは気にしないでください」

男は言った。

「……わかりました。じゃあ、その線で検討してみます」

心はずでに、次なる企画に向けて加熱していた。

三、発端

当時、エロゲーの急先鋒とも言うべきメーカーのひとつに、リーフがあった。

ノベルもの、と言われるジャンルをエロゲー業界に持ち込んだメーカーである。

零。そして痕。

恋愛でもエロスでもなく、物語性を追求したこれら実験的な作品は……知る人ぞ知る名作として、草の根BBSを中心に盛り上がりを見せた。

インターネットも普及していない時代。不特定多数が利用できる情報掲示板の影響力は、現在のネット環境よりも高純度……純粹といえた。

そのリーフがノベル三部作の締めくくりとしてリリースした純愛大作『Meru』は、前二作の評価を受けて爆発的なヒットタイトルとなり、同社を一頭地を抜くメーカーへと押し上げるのである。

無論、おれもリーフのことは知っていた。

おれがエロゲライターへと転進しようとしていた頃、時代はまさに『Meru』一色であった。

激動の時代だった。

美少女ゲームなるものが世間のオタクたちに広く認知され、同人と商業の両輪を走らせ得る戦車のご

とき経済価値が認知されたのは、『Tollari』の影響が大きい。

その経済効果は、様々な業界からかまびすしい連中を呼び寄せることになった。

おれもまたその一人と言えるだろう。

ただBBSへの仕事以外の接続をしていなかったおれは、草の根評による『Tollari』の支持には無関心だった。雑誌等の媒体がしきりに騒ぎ立てるのを横目で見て、ああそんなものがあるのか、と読み流す程度だったのだ。

恋愛ものには興味が持てなかった。

自分が打ち出すのは、伝奇ものだと決めていた。

それを許容してくれる業界を探していた。

小説では駄目だ。

性描写ははずせない。

性以外での過激な場面も必要だ。

分岐もいる。

だからこそエロゲーなのだ。

趣味としてはたしなまなかったおれだが、ある時

エロゲー雑誌を手にする機会があった。

何気なく読み進む中、○○○というブランドがシ

ナリオライターを募集する旨の広告を出していた。

おれはすぐに書類を送った。

書きためていた小説と、即興で作った企画類だ。

返事はなかなか来なかった。

同時期に送った書類は、そのほとんどが実を結ば

ずに戻ってきた。

大手もあった。

面接を受けたこともあった。

だが実績もなく、新卒でさええない、底辺ライター

のおれだった。

おれを使おうという会社はなかった。

月収五万にも満たない。物書きとも言えない存在。実際、生活を支えているのは深夜シフトの別仕事で、こちらの収入は『本業』の五倍以上だった。

労働時間も、実質8時間程度だ。

それでできた余剰の時間が、本業タイムになって

いた。

人が道楽と馬鹿にする本業ではあった。

だが当時のおれは、取り憑かれたように文筆業に

居場所を見いだそうとしていたのだ。

しかし底辺ライターの悲しさか、まわってくるの

はギャラも安く、メ切も厳しい、小口の仕事ばかりだ。

それ自体、他にいくらでも欲しがる者はいて、滅多

にまわってくるものではない。

さらに小さな仕事はまったく評価に繋がらない。

いくらこなしても、

どれだけ早く納品しても、

品質に気がつかなくても、

知名度が上がることはなく、チャンスに繋がるほ

ど興味を抱かれることもない。

誰にでもできる仕事だからだ。

ステップアップの機会などなく、本人が飽きるか

潰れるかによつてのみ、幕引きがもたらされるよう

な気がしていた。

栄光などない。

決まった道のりを歩いているだけ。

仮に実力があつても、発揮するチャンスさえない。

空回り。

終わってしまった人生の、過去を追想するにも似

た絶望感が、常に心にあった。

銀幕の世界はすぎた野望としても、テレビ脚本、

いや、その補佐でも良い。

スタートラインに辿りつきたい。

自分を見いだすためだ。

そのためには、兎に角ものを書く場所が必要な

だ。

暇さえあれば書類と履歴書を送った。

最初に応募した○○○というブランドのことは、

とうに忘れていた。

応募書類を返却しない会社も多かったのだ。○○

○もそのクチだと思っていた。

ところがである。

ある日、電話が来た。

○○○のディレクターと名乗る人物からだった。

「ゲームの企画を見せてください」

こうしておれと新進メーカー○○○との、長く苦

しい試用期間がはじまるのである。

どんな企画を送るのか？

決まっている。

伝奇だ。

それもオカルト奇りのものが好ましい。

もともと魔術に関する蔵書には、少々とはいえな

い金を使っていた。

乱読の気があるおれだが、特に宗教と魔術に関す

る書籍は好んで集めた。

金額的には100万を超える額が、この手の書籍に消

えていた。

なんのために、というわけではない。

創作で十全に利用できるかと問われれば、否と答

えるしかない。

癖のある、趣味の書籍類でしかない。

読書に実利しか求めないおれだが、ことオカルト

に限ってはビブリアオマニアを思わせた。

無論、たぶんに精神的な面を持つリアルな魔術感

覚は扱いが難しい。

だからこそ伝奇というアプローチなのである。

菊池秀行や夢枕獏などに代表される伝奇バイオレンスのシリーズはあまりにも有名だが、おれが真に好んでいたのは朝松健というホラー作家だった。

現実と魔術、薄皮一枚で隔てられた両界をまたぐ者たちの物語を、おれは愛した。

おそらくは魔術というおどろおどろしいものが、現実の裏側に潜んでいるという陰鬱な構図に、惹かれるのだろう。

壊したい。

おれには遠いものでありながら、当たり前のように多くの者が手にする『普通の人生』というものを、蹂躪してやりたい。

全て台無しにしてやりたい。

黒い感情だった。

危険で、始末に負えない。

だが創作に写し込めることで浄化できると信じていた。

物を書かねばならぬ。

ただ、書かねばならぬ。

四、崩落

「すいません、今回も没ということ……」

その言葉はおれを沸騰させるに充分すぎた。

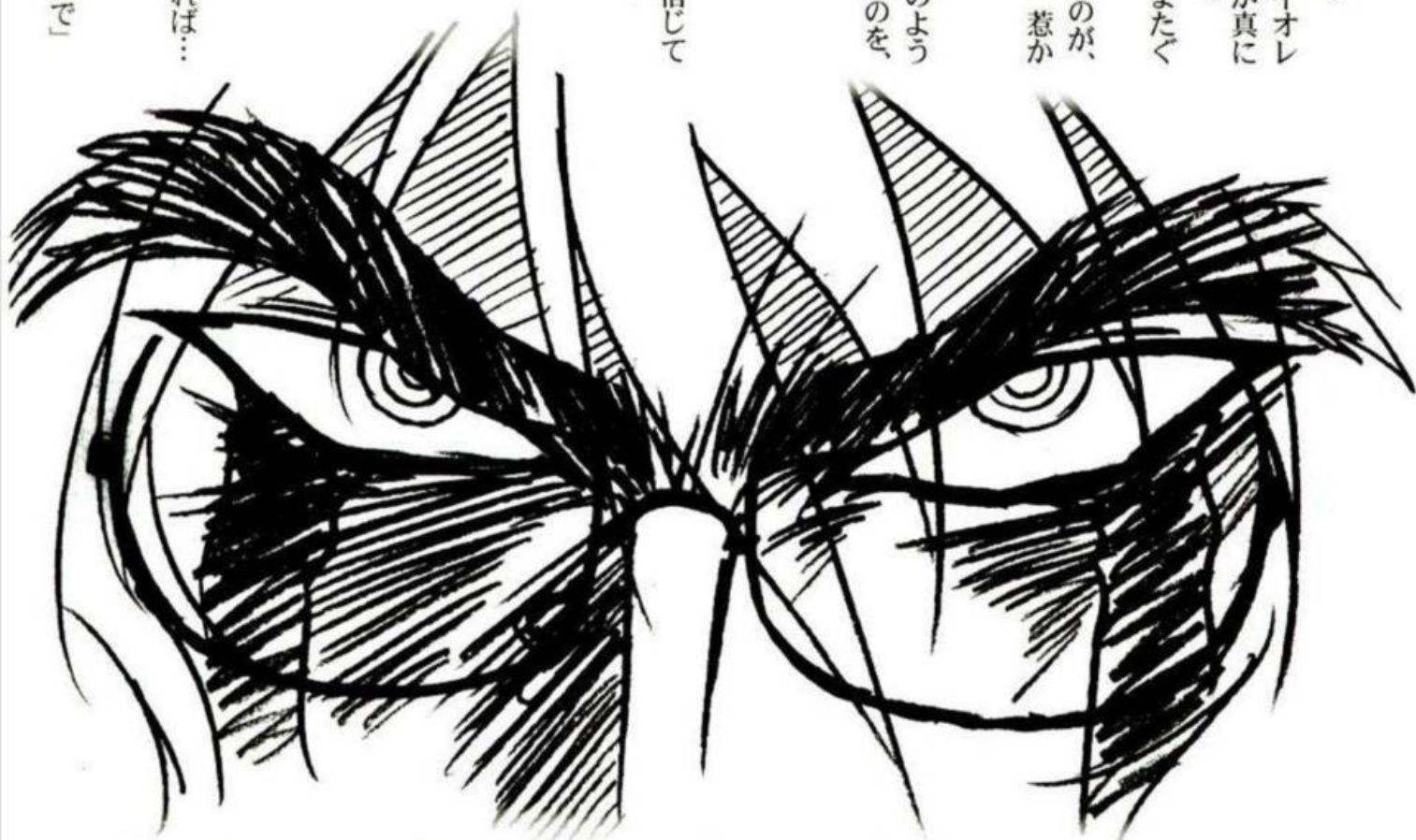
「そんな！」

すがるような口調が、つい飛び出た。

「今回ののは本当に面白いんです！ ちゃんとやれば……きっちり仕上げることができます！」

血気に任せて、おれは食いついていった。

「わかります……わかりますが……上の決定なので」



「しかし！」

「良いと思うんですが、どうも一般的でないというか……たぶんそのあたりが原因だと思っんですが」

「たぶんって、あなたが決めてるんでしょ？」

「あ、いえ、私は見てるだけで……決めてるのは、うちのもつと上の人間です」

取り繕うように、ディレクター氏は言う。

「上の……？」

黒い悪寒がさつと走った。

元来、おれは年上受けが悪い。

態度が、自信家ぶったものに見られるからだろうか。

おれは人に可愛がられた経験がなかった。

冷淡に無視されるか、攻撃されるか。どちらかだ。

そして向けられた敵意に黙っているほど、生やさしい人間でもない。

どこでも問題を起こした。

歯に衣着せず、ものを言った。

若かった。

本心を隠すことが罪悪だという感情に憑かれていたようなものだ。

そして本音を叩きつけて、生き残った者こそ……

真の友と言えるのだと信じていた。

愚かな考えだった。

気がつけば、おれは一人だった。

孤独になつてた。

激しい言葉をぶつけられて、不快に思わない者などいない。

本音を言い合える関係などは、滅多にないものである。

親友というものを持ったことさえない。

表面的な知人ばかりのつきあいだ。

敵だらけだ。

おれは敵だらけだ。

誰にも認められない。

普通ではない。

異常。

親にも言われたことがある。

離婚し、借金を背負い、おれによって養われていく親が言うのだ。

人の好意に助けられたことがないとは言わない。

だが……純粹に人に借りを作ったことが、果たしてどれだけあるだろうか。

どうしておれはものを書きたいのだろう。

どうしておれは、ただものを書いてそれを胸に秘めて、我慢してはられないのだろう。

発表するどんな意義があるのだろう。

なぜ薄汚いものを描きたがるのだろう。

汚物を人の眼前につきつけるような真似に、焦がれるのだろう。

あまりにも卑屈な、自分の本心を垣間見た思いだ。

「あなたは、判定に加わっていないんですか!？」

「……ああ、私は窓口ですから」

「ディレクターでしょう? ゲームのディレクターというものは……その……製作の実権を持っているのではないんですか?」

「あ、うちでは、一番上の人間が決定権を持っていて……」

「一番上の人間とは、面接で挨拶をしたことがあるだけだ。」

「じゃあ……その人に気に入られなければ、企画が通ることはないんですか?」

「そういうわけではないんですが……」

歯切れが悪い。

ディレクター氏の曖昧な理由がわかった。

断定できないのだ。

知らなかったから。

おのおのの企画がどのように判断されているのか、知らなかった。

だから「たぶん」とか「と思う」という表現ばかりが頻出するのだ。

愕然とした。

理性とは別系統の感情が、俺をひどく高ぶらせた。

「では、おれがどんな企画が欲しいのかと訊いたときに、Yさんの好きなものと言ったのは?」

「それは、その、本人が乗れる企画でないと、なかなか面白いものには……」

何を言っているんだ?

自分が外国にまぎれてしまったかのような感覚に置かれた。

目の前で話されている言葉が、日本語とは思えなかった。

「だから、その面白いと思う企画は、全部没になっているじゃないですか。いったい幾つ出せば満足してもらえるんです?」

「かろうじて、口調を冷静なものにする。」

だが火炎のような熱気が、はしほしにまとわりつくのを消火しきれない。

ディレクター氏は気づいているようだった。

申し訳なさそうに、言う。

「いつか、本人も乗れて会社もGOサインを出せる企画が来るかなと思っていました……」

「そんな……それなら適切な発注をいただければ、最初からそういう方針でやりましたよ、おれ」

「それだと、ライターさんの魂がこもらないですよ……」

……」

「だってそんな、何もかも得ようとしても……」

会社に都合の良い企画も、ライターの魂も。

没になったいくつもの企画を作る手間も、時間も。

起案は無報酬なのだ。

いや、金の問題ではない。

壁を感じた。

途方もなく高い、垂直に切り立った絶壁を。

砕かねば……砕く? これをか?

どうやって?

「今回出した企画、見ていただけました?」

「ええ、軽くは……」

「この企画なんです?」

おれは印刷して持参した、一番の自信作を取り出す。

「所感ですが、これはいけません。かなり密度の高い、自信作です。売れるかどうかはともかく、話題性にしてみせます。もし見ていただけで、これを面白いと思ってくれたなら、是非上の方に薦めてはもらえないでしょうか?」

採用を請う言葉であった。

創作者として、許される態度だったのかどうか。

混乱の渦中にあるおれに、判断できることではない。

いや、放棄したのだ。

プライドを、一枚だけ。

孤独な人間はプライドが高い。

甘やかされた人間も高いが、そういう高さとは違う矜持がある。

『こいつらに媚びへつらうか!』という意地である。

それは単独で生きるための、力である。

ときとして誇りが、人を生かすのだ。

それをおれは、捨てた。

捨てるべきではないものを捨てた。

何も残らなくなるぞ。

心の奥で、誰かが告げた。

構うものか。

からっぽになるぞ。

なるものか。

身乗り出して、言を継ぐ。

「これを採用してはもらえませんか？ 内容は徹底的に仕上げます。ギャラはそちらで一番安い……いや……試用期間ということで、タダでもいい！」

意気込んで言う。だが、

「あ、Yさんの待遇はまさに試用期間ということで、企画が採用されたあと実際に一本分のテキストを執筆してもらって、それで採否を決めるということになっていきますので……えー、ですから、その、もともとタダなんです、はい」

「あ……」

そうだった。

そんな話だった。

新興メーカー○○○はそれまで、ライター関係でいろいろな苦勞をしたため、採用には慎重になつて

いるのだという話を面接で聞いた。

一本書かせてから採用、ということが取り決められていたのだ。

「じゃあおれは……タダでも、好きなものを書かせてはもらえないんですか？」

「あ、Yさんは実力はあると思うんですよ。送っていた小説は、なかなかのものでしたし……ただジャンルが……少々」

「では、どういうジャンルがいいんですか？」

「それはYさんの好きなものを……」

「教えてください！」

怒鳴った。

おれはこう言ったのだ。

発注してくれ、と。

曖昧な言葉で、おれから全て絞りだそうとしない

でくれ。

信頼してくれるなら、やりたいことを告げてくれ。

……もう勘弁してくれ。

そんな心境になつていた。

少し間を置いて、ディレクター氏は言った。

「ええと、今の流行と違う部分が、気になりますねえ……」

流行。

頭を殴られたような気分になつた。

流行を追うのは消費者の仕事だ。

感性でものを作る人間が抱きがちな信仰を、おれ

もまた持つている。

創作物において流行を軸にするという行為は、一

種の思考停止。根幹の部分で創造を放棄した、許す

べからざる態度。

そこを刺されたのである。

「流行……ですか？」

声が震える。

「そんなかたく考える必要はないですけど……あくまで私の個人的見解ですから」

悪い人ではない。

よくわかる。

中間管理職の人間特有の、諦念にも似た悲哀を感じ

じる。

柔らかなく曖昧な物言いいも、無用のトラブルから身

を守るためには必要なことなのだろう。

だが。

今たまたまなく、相手が憎かった。

「○○○さん全体の見解はいただけないんでしょ

か？ その、上の人に希望を出してもらうとか……」

「……すみません、それはできません」

どうしてだ。

発言することには確かにリスクがあるものだが。

発注さえできないとは、どういうことなのだ？

「でも、おそらく流行をもう少し意識すれば、大丈夫

だと思います。こちら遊びたいわけではなく、Y

さんに書かせてみたいという気持ちはあるみたい

なんです」

「……教えてください」

地獄の底から響く声だった。

「流行というものを、自分に」

男は慌てた。

「あ、私も個人的には皆で同じことをしても仕方ない

と思うんですよ？ 多少変わった切り口でやってい

かないと、そのうち閉塞してしまいますし。ただで

すね、うちでは厳しい企画というものが——」

ディレクター氏は話した。

おれは聞いていかなかった。

ただ該当する単語が発せられるのを、じつと辛抱

強く待っていた。

はやく言ってくれ。

獲物を待つ獅子のように、待ったのだ。

そして——

「……Tollheartというゲームがあるんですが」

「Tollheart？」

あれか。

雑誌で見たことがある。

『零』『痕』ときて、好評を博してきたビジュアル

ノベル・シリーズの集大成である。

「それに似た企画なら、通るのですか？」

「えーと、そうですねえ……たぶん」

唇を噛んだ。

噛むしかなかった。

自分を押さえつけるために。

道理もわきまえぬ愚かなおれを、力づくでねじ伏

せるために。

従うべきだった。

彼の言葉にも、流行にも。

他者の通った道のりを、模倣するべきだった。

会社がそうしろと言うのだ。

従って当たり前。

自分は共同作業の場に行こうとしているのだから。

当然のことだ。

当然のことじゃないか。

無論、書く以上は文責を担うのだ。

これも至極当然のことだ。

会社の命令で人気作を模倣し、その責任ごと負う

のだ。

仮にそのことで盗人呼ばわりされても……そう、

それさえも仕事の一部である。

当然の論理だ。

当然。

とうぜん……

だが待て。焦るな。

盗作ではない。

オマーヂュにすればいい。

やったこともない作品のオマーヂュか？

シニカルな思考が、爆発しては散る。

尊敬なき模倣を肯定するどんな言葉がある？

魂はどこにこめる？

すでにある鋳型を用いてできるものは工業製品で

はないのか？

うるさい、だまれ。

いくつも、散華する。

じぶんわからなくなる。

めまい、する。

「う……」

目頭を抑えた。

「大丈夫ですか？」

おれは顔をあげた。

涙など、出ていない顔だ。

「ええ、たいしたことありません」

晴れ晴れと、言った。

「ええとですね、Yさんが頑張って書いたシナリオが

話題になり、ゲームが売れば……いつかこういっ

たものが作れるかも知れませんか」

殺し文句である。

反抗のしようがない、完璧な企業側の言い分だ。

頭では完全に理解している。

うるさいのは感情だけなのだ。

そんなヤツは、簡単に殺せるだろう。

大人なのだから。

「なるほど。最初はそれで頑張って、正式に雇ってい

ただいたあとで大きな実績を作れば、ある程度自由

な作品作りができるかも知れませんか」

「ええ、そうですね、私が言いたいのはそういうことな

んです。そのことをYさんに理解してもらいたかつ

たんですよ」

「わかりました」

おれは破顔した。

ディレクター氏と、他愛ない世間話をした。

おどけてみせた。

内心は――

憤怒。

一色であった。

駄目なのか。

おれは、駄目なのか。

素の俺では、ビジネスにならないのか。

誰にも認められないのか。

常に軽んじられてきたおれの人生は、闘いのよう

なのに。

優れた自分になり、満足したいのに。

それは物書きとして自立することで達成される。

会社員では、組織の力に生かされてしまう。

公務員では税金で生きてしまう。

だからこそフリーランサーだ。

それも物書きがいい。

渾身の力をこめて仕事をすれば、いくらでも向上

できる余地があったからだ。

だからおれは物書きを選んだ。

だが今、おれの物書きの道は流行に向いた。

上の力で、向けられたなどとは言わない。

おれが選んだ道だ。

その結果、通らぬ道理があるとしても、それはお

れの決断の範疇なのだ。

だが流行に頼るといふ行為は、自分を拒絶してき

た世間に対して媚びるようではないか。

おれは自分を攻撃した。

ディレクター氏の言葉を、意識した。

『おまえの企画などゴミだ。通るものか。それより、おまえよりもっと優れた者がやったことを真似ろ。それなら劣化コピーでも採用してやらんこともない』

誰にも認められなかった。

誰に信頼されることもなかった。

ただ自分だけが信じているおれという存在。

認められないことが、おれの勉学への傾倒を加速した。

募集広告に『誰にでもお任せできる簡単なお仕事です』と書かれる底辺ライティングよりも、もう少し上の仕事ができるように自分を高めた。

何年、学んできたんだろう。

だというのに相変わらず、おれという存在は取るに足らないものだった。

だがそのことを認めるほど、達観できていなくなった。

「わかりました、やります」

感情をおさえた、必死の一言である。

おれはゴミなのだから、軽んじられて当然だ。だが、次こそは——

「おれ、Tollheartを、やります」

五、魂

帰り道、書店に立ち寄る。

最近、エロゲー雑誌というものが続々と出版されている。

うち一冊を購入する。

自宅に戻り、雑誌を開く。

E-Loginというこの雑誌の付録が『TO Heart』攻略小冊子だった。

読みふける。

幼なじみの少女やクラスメイト、上級生や下級生などと恋をするストーリーだ。

正直、恋愛ものには興味がなかった。

なぜコレが受けるのか、理解できない部分があった。

描かれる日常が心を癒すのだという。

ヒロインたちのかわいらしい性格が、潤すのだという。

だが……それで？

物語に餓えた者が、おだやかな日常で腹をくちくすることができののだろうか？

食い入るように、おれは小冊子を読みふけた。

満足のいく答えは得られなかった。

無為に時間は過ぎていった。

いくら考えても、おれには『TO Heart』のような企画を絞り出すことはできなかった。

誰かがやったことを真似るといっては、意外とさじ加減が難しい。

まったく同じになっても駄目だ。

とはいえ、違いすぎても、この場合まずい。

適度に『TO Heart』っぽくあり、さらに売れやすい要素があれば完璧なのだろう。

それが良いとされる物作りなのだろう。

「縮小再生産じゃねえか」

おれの中には、新しいかもしれない物語があるかも知れないのに。

少なくとも、未踏峰に挑む気持ちは萎えたことがない。

勝算だつてあるんだぜ？

けど、実績がなければ誰も認めてはくれない。考える。

書かねば。

作らねば。

奴らに認められるものを作らねば。

気持ちばかりが焦ると、指は凍てついたように静止した。

これでは次の行動が鈍るばかりだ。

おれは気分転換に、書庫に手を伸ばした。小説でも読もう。

一日に三冊から五冊ほど、読んでいる。

速読を使っている忙しい時分にはペースも落ちるが、だいたいそのくらいの数を消費している。

気分転換できる、未読の本はあつたらうか？

まったく本の調達ときたら、いつも一苦労である。

一週間自宅にこもろうとすれば、30冊以上のたくわえが必要だ。

図書館をフルで活用しても、20冊以上。

だからなるべく分厚くて読み度がある、学術書等を読むことが多い。

うまくすれば一日一冊ですむ。

どうしても困難な時は、聖書を読む。

オカルトを好むなら、聖書は宗派別に持っている。

それを読み比べる。

それでも駄目なら、辞書を読む。

辞書はいつまでも読んでいられる。

小説は駄目だ。

速読対象である。

たいていは結末から読む。

そうすることで読書を短縮できるのだ。

娯楽目的ではない。

分析目的だからだ。

人の書いたものを読んで楽しむおれではない。

書く、おれなのだ。

だから楽しまない。

楽しむくらいなら、嫉妬する。

全身全霊で、嫉妬する。

火に薪をくべるように、ねたむ。

書棚から、数枚の紙片が落ちた。

「……お？」

拾い上げて、驚いた。

それはずいぶん昔、手書きでしたためた創作メモだったのだ。

「ハハハ、オカルトものだ」

中学生時代のものだろうか。

今のアパートに引っ越した時、書棚のはじめにまとめて挟んでおいたものが、本をひっこぬいた拍子に飛び出てきたのである。

「悪魔君の女の子版だ」

ほほえましい気分で、それを眺めた。

汚い字で、登場人物と物語が書いてある。

いろいろなアイデアが、余白狭しと綴られている。

引っ越した当時にも思ったが、これは処分できるものではない。

あまりにもピュアすぎる。

児童向けの作品にも、オカルトものは多い。おれもよく読んだ。

特に水木しげると手塚治虫。

言うまでもなく『悪魔くん』と『三つ目が通る』のことだ。

この二つの影響は途方もない。

物書きを目指すことさえ知らないおれが、夢中になつて読んだものだ。

憧憬が書かせた、子供の戯言。

それがこのメモだ。

「ハハハ……魔術戦争とは」

世の中の節理も知らぬ頃の。

「巨人の召還」

己に対する、圧倒的な全能感を持っていた頃の。

「魔法の道具」

「樹海での決闘」

「生きる意味」

「現代の魔術師……ハハハ、ハハハハ」

伝奇とはなんと荒唐無稽なものなのだろう。

「面白いじゃないか」

こんな気分転換があつたとは。

おれはメモをすべて抜き出して、すみからすみまで読んだ。

読み終わったとき、おれの気分はすっかり晴れていた。

切り替わっていた。

「さて」

やるか。

企画を作るか。

作らないと。

せつかくのチャンスなんだ。

試用期間として1000KBものタダ働きではあるが、不況なのだから仕方ない。

〇〇〇だつておれと出会う直前まで、ライター関係でいろいろな苦難に遭遇して、財布の紐がたかくなっているんだ。

考えてみれば、かわいそうな奴らだ。

運のない連中だ。

「じゃあ、資料があるな」

おれはやる気を出した。

そうだ、それでこそプロだ。えらいぞ。

しっかり書けよ。

だが学園ものなら、たいして資料は必要はないな？

書棚に向かう。ひとりでに向かう。

おいおい、どの棚に行つてるんだ？

それは学園とは関係ない棚だぞ？

国書刊や魔女の家 *Witches* なんかがおさめてある棚じゃないか。

その棚の前で、どうするんだ？

手を伸ばす。

一冊の背表紙に指がかかった。力強い指。頑健な意志。

『高等エノク魔術実践教本』

おまえ、まさか、また——

「……パクリはやめよう」

それはプロの思考ではない。

素人のわがままだ。

だけど……おれは脚本を単なる工業製品にしたくはなかった。

技術は大事だが。

何よりも、魂が大事なのだ。

「伝奇を作ろう」

ネタならある。

20以上も出して、枯れ果てて、だけどまだネタはある。

とびっきりのネタだ。

手にしたメモを、握る。

昔のおれからのプレゼントだ。

オカルトは駄目。伝奇は駄目なのだ。

学園の恋愛がいいのだ。



にも関わらず、だからこそ。

「おれの全てをぶつけて、作ろう」

そして俺はマシンに向かい、キーボードを叩いた。

ウィンドウス用ゲーム企画書

『魔術大戦』

「……できた」

そう呟いた時、すっかり憔悴していた。

ものを書いてここまで疲れたのは、久しぶりだ。

魂を削って、文字に押し込めた気がする。

18禁PCゲームの企画書は、会社や個人によって千差万別である。

ストーリーとキャラだけに絞ったもの、綿密な市場分析を記載したもの、イラストやグラフなどをふんだんに用いたもの。

基本的にはライター＝起案者であることが多い。

今回おれが任されたのも「自分で執筆するためのエロゲー企画」というものだ。

内容のあらましを綴った『概要』と『あらすじ』、あとは『登場人物』『プロット』……書類としての最低限を満たそうと思うとこのくらいだ。

だがあらずじはともかく、プロットとなると時間がかかる。

綿密な書き割りを作っていても終わらない。後半はある程度、要所要所に絞った内容になっていく。

それでも筋の通った物語を考えるのは、骨の折れる作業だ。

いつになく気合いの入った企画ができあがった時

には、すでに朝を迎えていた。

仮眠を取ろう。

それで打ち出して、郵送しなければ。

だが。

「まだ……ちよつと、書き足りないのか？」

指が痛むほどキーボードを叩いたはずなのに、まだ少少だけ、物足りない気がした。

「しかしこの企画は、もう万全だ。何を足しても蛇足になってしまふ」

とはいえ、新しい企画を用意するほどの余裕はない。

軽い気持ちで……そう、小さめの企画を一つなら、行ける。

「ふむ」

その思いつきは、ちよつとした悪戯心からのものだ。

『TO Heart』風の企画……か

それを作る。

余勢を駆って作る。

力が入るまい。

もともと二番煎じ、二匹目のどじょうだ。

キャパシティはそう大きくない。

『TO Heart』ではない学園もの、という指定なら、新しいものを模索できたかも知れない。

だが会社は『TO Heart』を望むのだ。

そうでないと採用できないと暗に示したのだから。

「よし、やってやろうじゃないか。企画を作ってやるさ。お望み通りに」

そう考えると、不思議と気力がわいた。

例の雑誌付録を手にとった。

改めて見直してみる。

なるほど確かに人気作であり、合う者には素晴ら

しいできればえなのだろう。

だが……自分に甘い恋愛など描けるのだろうか？

書けはしないさ。

底の浅いものになる。

それを、見せつけてやるのだ。

明確な違いを見れば、『魔術大戦』を選ぶしかない

とわかる。

おれに何を書かせるべきなのか、わかるのだ。

「いいぞー」

俄然元気になって、キーボードに両手を置いた。

「こんなもんか」

できあがった。

やってみると、空気をつかむような作業だった。

まるで手応えがないのだ。

どこが面白いのか、まるで理解できなかった。

とりあえず適度に盛り上げつつまとめてみたが……

企画書を読み直してみる。

〇〇〇〇〇〇〇

この企画のタイトルだ。

恋愛に青春要素を加味してみた。

様々なヒロインと恋をし、明るい未来に歩いていく物語だ。

同い年の幼なじみ。

孤高の少女。

可愛く神秘的な後輩。

不思議な雰囲気の後輩。



陽気な外国人。

澁刺とした後輩。

どこかで見たようなヒロイン像。

あまりにも平坦で、工夫のない構成。

好んで二番煎じに甘んじているような、無理のない物語。

だが世俗的な意図によって生まれてきたソレを、

素朴と言うことはできない。

まるで工業ではないか。

単体として見たとき、面白いと言われるものにな

っているのか？

己がしたことが正しいのか判断できない。

一つ言えるのは、ありきたりであること。

きつと没になるに違いない。

没になって当然の、くだらぬ代物だった。

なにしろ入れた気合いが違う。

おれの全てを込めた『魔術大戦』とは違うのだ。

してみると……この勝負、いささか不公平であつ

たかも知れぬ。

〇〇〇〇〇〇〇〇はあくまで体裁をつくらうための

企画の一つだ。

おれは企画書を印刷し、フロッピーディスクと

もに封筒に入れ、会社に送った。

あとは、待つばかり。

「〇〇〇〇〇〇〇〇を採用させていただきます」

それが、結末だった。

知らなかった。

おれはあまりにも知らなかった。

現実というものを。

リスクに怯え、他の誰かがやったことをなぞる思

考の、絶対王政を思わせる支配力を。

「もう一つの、企画は？」

言うど、相手の男は申し訳なさそうな顔をしてみ

せた。

「すいません、あれは没ということになりました」

「没……だって？」

馬鹿な。

おれはつぶやいた。

こんな落胆を味わうとは。

めまいがした。

「没、没……」

目の奥が赤くなる。

血の色なのか？

わからない。

ただ、悔しい。

くやしい。

企画を落とされたことがつらいのではない。

魂の入らない企画が、あっさり採用されたこと

が悔しかったのだ。

『魔術大戦』がからっぽの企画に敗北したことが、

たまらなく無念だった。

創作に独創はなしと言う。

かつて誰かが作ったものと、偶然似るのは構わな

い。

だが意図的に皆で同じものを作る行為に、何の意

味があるのか。

いや、意味はあるのだ。

既存であるがゆえに、売りやすい。

それはリスクの軽減である。

エロゲーといえどもゲームだ。共同作業である。

皆で作る以上は、皆が生活できねばならぬ。

家族のいる者もいる。

売れる物作りを意識することは、当然のことだ。

その意味では、オカルトなどという冒険を避け、

大衆に支持される恋愛ものを選択するのは正解であ

る。

だが。

オカルトものでも、面白くすることはできるじゃ

ないか。

そうも思った。

「個人的には、たとえばこれはとても面白いと感じま

す」

と、おれが渾身の力で書き上げた企画を取り上げ

る。

「ですから、まずこの〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇を成功させてか

ら、改めてこの企画の準備をしてもいいと思うんで

すよ」

してもいいと思う……確約ではなかった。

甘やかな言葉とは裏腹に、現実が予想した通りに

冷たくしわい。

その瞬間、おれは不意に自分を見失っていた。

「それですね、前にもお話ししましたように……ラ

イターさんは途中で潰れてしまう人が多いんですね。

エロゲーのライターというのは重労働ですから。こ

の採用された企画を、まず完成させてもらって……

そのデキを見てから採否を決定させていただくとい

うことで——」

男は何か言っていた。

言い終えた。

「わかりました」

おれは自動的に応じた。

何もかも、どうでもよい。

確かに自分は新卒でもない、どこの馬の骨とも知

れない若造だ。

軽んじられるのが仕事だ。

おれを認めてやれるのは、おれだけだ。今までも、これからも。

そのことがわかった。

「さっそく、執筆に入りたいと思います」

人形のような存在となって、見えざる何者かが操るに任せ、幽玄と立ち上がった。

キーボードを叩く手が、自分のものとは思えない。異様な速度で執筆が進む。

「……」

作業は終始、無言。

〇〇〇〇〇〇〇〇は思った以上に順調に進む。

たやすい作業だ。

やっていることは、作法の再現だった。

出会い。試練。別離。再会。

ヒロインごとの、出会い、試練、別離、再会。

お約束を繰り返す。

使い回し、形を変え、似たようなことを延々と。

美少女ゲームに作法があるとすれば、それはまさに

〇〇〇〇〇〇〇〇のことである。

ここには魂はない。必要ない。

技術だけでいい。

技術が作るのだ。

「……」

目が痛い。

ついまばたきを忘れる。

きつと血走っているに違いない。

指も痛い。

腱鞘炎になるかも知れない。

それでも書く。

なってみろ。

そう念じて、書く。

もげよと書く。

おれがシナリオの機械だとするならば、修理することだってできるのだ。

「……は」

おれは手を止めた。

口元に触れてみる。

笑っている？

おれは笑っているのか？

目元に触れる。

濡れていた。熱い。

泣いている？

おれは泣いている？

泣きながら、笑う。

もうわからない。

己が情緒が、理解外のものだ。

書く。

書く。

書く。

書き往く。

おれだって普通の人生が良かった。

人並みの仕事、人並みの結婚、人並みの家庭。

一人で死ぬのはイヤだった。

だけど、一人で死ぬしかないと感じてしまった。

人はどう自分を変えればいい？

世の中には、普通の人生を生きる、ということをお

あまりにも自然にこなす連中が多すぎる。

それらはすべて、おれの手の中から逃げていった。

おれは普通を剥奪された身だ。

それからだった。

認められるのではなく、認めさせる、という欲求が爆発的に膨れあがってきたのは。

容姿や素質ではない。

研鑽して身につけた大質量の実力をもって、問答

無用に。

だから書くのだ。

これは復讐だ。

復讐なのだ。

黒い炎が、おれを燃焼させる。

燃え尽きてやる、と。

知らず、おれは呟いていた。

燃え尽きてやる、カスも残らないくらいに。

闘いだ。

ユーザーとおれの。そしておれとおれの。

世界との。

おれが満足して死ぬために。

ただ、おれが満ち足りるための。

そのためだけに生きるべく、物を書くつもりだった。

だが今……おれは誰かの通った道を歩まされるのだ。

だ。

敗退。

おれは初戦敗退を喫した。

〇〇〇〇〇〇〇〇を書く。

ただひたすらに書く。

見る。あんなに嫌っていた、機械的な執筆をする

おれだ。

こんなにはやく書けるぞ。

迷わないからだ。

思い入れがないからだ。

だからこんなにも書ける。

24時間書くことだってできる。

気合いは必要ではない。

機械になる。

シナリオ・マシンになる。

黒い炎で動く、精密機械だ。

魂はいらない。

そして、○○○○○○○は――

完成した。

第一章『誇りなき転進』完

第二章『虚飾の中に破滅と栄光』に続く

あとがき／

時間が短すぎた……べ切12日て。

一日飲み会で潰れて、実質一日半くらい？

おれは日本語版未発売のアドバンスウォーズ2をブ

レイしちゃうくらい英語には堪能な人なので、厳密

には丸一日だけしか使えなかったが。うむ。メッセ

ージ読んでないしね。

とりあえず第一章を書くのが精一杯でした。ごめん。

なんかまじめな話になったけどギャグなんでそんな

感じで。予定していた報復絶倒（超遠大な個人間伏

線としての非誤字）のオチ部分まで書けなかったの

が残念。

次の機会があればリライトしてもいいしね。

あと挿絵つけておくれ。

アキラマンみたいな感じでよろ。

ババーンと。エンピツで殴りかきしたみたいなのタイ

ナミックプロ。

おれはもう石川賢先生には一生ついていくよ。

あ、あとあれ必要だね。

えー、この物語は実際にあったお話を多少誇張して

るだけで……じゃなくて、団体・人物は架空のもの

ではありません……でもなくて、架空です、全部、

伏せてあるけど、うるさい、しゃぶれメス豚！

けっこう伏せてあるから平気だよな？

ていうか全伏せじゃねえか。バカにしやがって。

Yのプロフィール／

シナリオライター。

むとうけいじのボン友。

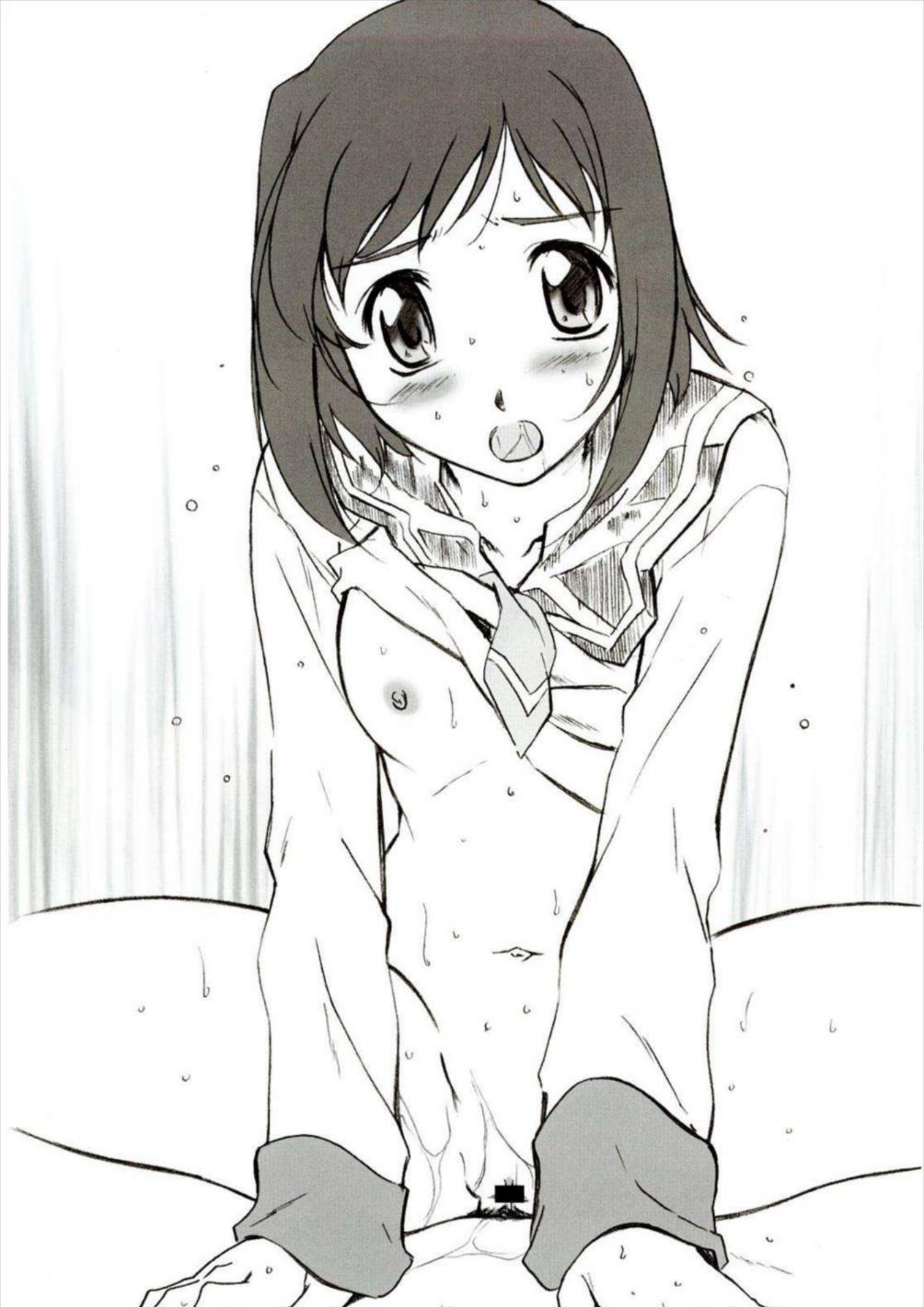
今にもほじけそうな15歳。













あしがまじごさいます。

この本誌にとりましてたいへんおかげさまでございませう。
毎回冬は年末発表のゲームがプレイしてこぼ
プレイ申しあげてございませう。——
おかげさまでございませう。—— 〆押忍〆

さて、いつかエロいイラストを描いてあげたいおかげさまでござい
ませう！ 西村 聡先生〆 今回のテーマは「サニター」です！！ とか
思ってたが「葦原」だよ！ みゆみ先生〆 毎度ありがとうございます。
WWE 楽しんでますわー。のみに行ってましょー。
せんとりく先生〆 おかげさまで〆 何か描いてくれたらいい時
がある不機嫌だったのか気がかりです。恐かったです。
とて「フッカー」〆 Y先生〆 やびいよこし〆
おサニターだよ〆 さし絵 俺の力量じゃこしたくない。
ごめん〆 こも連載だよ〆 次も楽しみだよ〆
めもろ！ フッカー〆 うか————— 〆〆

ひもくじも本誌にて。二二にのせ入。

| | | |
|---------|-------|-----------|
| 貴子ボコババ！ | むとらHに | P3 ~ P16 |
| 餓死伝 | Y | P17 ~ P33 |
| イラスト | 西村 聡 | P34 ~ P35 |
| イラスト | みゆみ | P36 ~ P37 |
| イラスト | せんとりく | P38 ~ P39 |
| あしがま | むとらHに | P40 - P41 |
| あくすけ | | P42 |
| 表紙とか | むとらHに | |

ま、あくすけとかは せんとりくさんか... 表紙とか。

で、「美島の目」でございませー。貴子ボニバニ一〃
おら、大好き!!(健介調)おねえさん大好き!!(健介調)

あー、よかつたよかつた。

何か? いやあ
どうっか来たっス。
いづい。人生とかも。
うそ!! ぼく元気!!
「エーイ!! あ、「ア
クス仮面」も大好き!!

引こしたっス...
くるんことかおこりません。
カメラ紛失した。リ、「ア
ラオ」だけ出るからた。
すぐ意識失いそうに
なつた...。

引こしてア!!
おらガーン!!
ほま

ボニバニ一〃

おらけん

K. MURAH

何か仕事のせいか
しほりばか
やわらな...
うた。





11714=L224+
T:女?

アストラルバウト Ver.6

発行 STUDIO TRIUMPH

著者 むとうけいじ

発行日 2003年12月30日 初版

- ・無断転写・無断掲載厳禁!!
- ・ネット上での画像転載、P2P交換等もご容赦ください。



STUDIO
TRIUMPH

